

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(41)

県道鹿児島本名線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

本吉田城跡

(カユウカ城跡)

1987年3月

鹿児島県教育委員会

序 文

この報告書は、鹿児島県教育委員会が県道鹿児島・本名線の改良工事に先立って、昭和61年度に実施した本吉田城跡発掘調査の記録です。

本吉田城は、大藏行忠氏の持城であったと伝えられている中世の山城で、この度の発掘調査によって、中世の山城の特色を示す郭・空堀・土塁などの遺構や白磁・青磁などの遺物が発見されました。

本書は、中世史の解明に貴重な手掛かりを提供することができるものと考えます。鹿児島県の中世史の研究や文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに、この発掘調査に御協力くださった県土木部道路維持課、吉田町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝します。

昭和62年3月

鹿児島県教育委員会
教育長 山田克穂

例 言

1. この報告書は、県道鹿児島・本名線の改良工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は鹿児島県土木部道路維持課からの受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
3. 本書で用いたレベル数値はすべて海拔絶対高である。
4. 挿図・図版の作製・浄書及びレイアウトは富田・弥栄が行った。
5. 本書の執筆担当者は次のとおりである。
第Ⅰ・Ⅱ章，第Ⅲ章 3 節……富田 逸郎
第Ⅲ章 1・2 節，第Ⅳ章……弥栄 久志

目 次

第 I 章 調査の経過	
第 1 節 調査にいたるまでの経過	P 5
第 2 節 調査の組織と経過	P 5
第 II 章 遺跡の環境と周辺遺跡	P 7
第 1 節 遺跡の位置と環境	P 7
第 2 節 周辺遺跡	P 7
第 III 章 調査の概要	P 8
第 1 節 本吉田城の縄張り	P 8
第 2 節 郭・曲輪・堀・土塁の調査	P 8
第 4 節 出土遺物	P 10
第 IV 章 まとめにかえて	P 13
写真図版	P 14

挿 図 目 次

第1図	本吉田城位置図・周辺遺跡	P 6
第2図	本吉田城遺構配置図・トレンチ位置図	P 9
第3図	第1～4・6トレンチ平面図・土層図	P 11
第4図	第5・7～9トレンチ平面図・土層図	P 12
第5図	出土遺物	P 13

表 目 次

第1表	堀の規模等一覧	P 10
第2表	土塁の規模一覧	P 10

図 版 目 次

図版1	本吉田城遠景	P 14
図版2	郭	P 15
図版3	郭・遺物出土状態(第1トレンチ)	P 16
図版4	帯曲輪1(第3トレンチ)・帯曲輪3(第7トレンチ)	P 17
図版5	帯曲輪3(第4トレンチ)・遺物出土状態(第4トレンチ)	P 18
図版6	堀3(第8トレンチ)	P 19
図版7	堀6・7, 土塁3・4(第5トレンチ), 土塁4(第5トレンチ)	P 20
図版8	堀5・6(第2トレンチ), 堀5(第5トレンチ)	P 21
図版9	出土遺物(青磁四)	P 22
図版10	出土遺物(青磁・白磁・土師器)	P 23

第I章 調査の経過

第1節 調査にいたるまでの経過

昭和61年8月1日、吉田町教育委員会から、県道鹿児島本名線の改良工事のため山城跡が破壊されるとの連絡が鹿児島県教育庁文化課にあった。ただちに文化課は現地踏査を行い、連絡を受けた丘が山城跡であると判断し、県土木部と協議を持ち、工事の一時中断の措置がとられた。そして、8月4日に県土木部道路維持課・鹿児島土木事務所・吉田町教育委員会・県教育庁文化課の4者で遺跡の取り扱いについて協議した。

その結果、概に8月1日に着工しており、防災上及び工事契約の上からも工事の中止は不可能であると理解され、また工法の変更も諸般の事情により不可能であると理解されたので、当該山城跡の記録保存のための発掘調査を行うことで4者は合意した。なお、その調査経費は県土木部道路維持課が負担し、県教育庁文化課の受託事業として調査することとなった。

第2節 調査の組織と経過

1. 調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会	教育長	山田 克穂
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課長	桑原 一廣
	〃	課長補佐	川畑 栄造
	〃	主幹	中村 文夫
調査企画	〃	主任文化財研究員	
		兼埋蔵文化財係長	立園多賀生
調査担当	〃	文化財研究員	富田 逸郎
	〃	主査	弥栄 久志
事務担当	〃	企画助成係係長	濱松 巖
		同 主査	京田 秀允
		同 主事	川畑由起子

なお、発掘調査にあたっては、鹿児島県文化財保護審議会委員三木靖氏の指導を得た。また、吉田町教育委員会社会教育課長西山久象・吉田町文化財保護審議員瀬戸山秋夫氏の協力を得た。

2. 調査の経過…日誌抄

- 8月18日 道具類の搬入・テントの設営の後、作業員に発掘の方法等を説明。頂上の郭に第1トレンチを設定し発掘開始。県文化財保護審議会委員三木靖氏来訪され、同氏と城全域の踏査。縄張り等について指導をうける。
- 8月19日 第1トレンチの発掘終了。第2～第6トレンチを設定。うち第2・3トレンチは表土直下に地山が出て終了。
- 8月20日 第4～6トレンチの掘り下げ。第7・8トレンチを設定し掘り下げ始める。



- 1 本吉田城
- 2 大原遺跡
- 3 向下堂遺跡
- 4 小山遺跡
- 5 谷ノ口遺跡
- 6 宮後遺跡
- 7 上 城
- 8 松尾城

第1図 本吉田城位置図・周辺遺跡

8月21日 第4～8トレンチ掘り下げ。第6・7トレンチ終了。各トレンチ平面図・土層図の作成及び写真撮影等を行う。

8月22日 第4・5・8・9トレンチ掘り下げ、同平面図・土層図の作成等を行い、発掘終了。道具を片付け、徹収する。

第II章 遺跡の環境と周辺遺跡

第1節 遺跡の位置と環境

本吉田城は鹿児島郡吉田町大字本名字本吉田に所在する。吉田町は鹿児島市の北西に位置する町で農村地帯であるが、近年は鹿児島市のベッド・タウンとして宅地造成等も行われている。吉田町は全体的に山地が多く平地は大原周辺の台地と思川流域に展開する狭小な谷底平野くらいのものである。

本吉田城の位置する本名は同町のほぼ中央部にあたり、大原台地の北、思川の支流本名川の形成する谷底平野が開けはじめるところである。本吉田城は吉田町立本名小学校裏の山にあるが、この山は本名川の支流にはさまれており、谷底平野に舌状に張り出している。この2本の支流は、南側（本名小学校側）の支流を「マエンコッ」（前の川）、北側の支流を「ウシロンコッ」（後の川）とそれぞれ呼称されており、城の存在とを併せ考えると興味深い。この2本の支流は各々狭小な平地を形成しており、いずれも現在は水田として利用されている。水田面の標高が約150mで城跡の最頂部が約221mであり、比高差は約70m余ある。またこの山は城跡の西端部でくびれており、そのくびれ部をうまく利用して縄張りされたようである。

第2節 周辺遺跡

吉田町内には原始・古代の遺跡は多くないが、吉田町立吉田南中学校敷地内の大原遺跡は縄文時代早期の吉田式土器の標式遺跡として著名であり、またその他九州縦貫自動車道の建設に伴って発掘調査された、小山遺跡・谷ノ口遺跡・宮後遺跡等が知られている。

城館等の遺跡として上城城址・松尾城址が知られており、前者は九州縦貫自動車道の建設に際して現地踏査が行われ、その報文中^①『……この城は南北朝期城郭（その後再使用されていないもの）に相通ずる面が多々あるが、腰曲輪が発達していることと出土品により室町時代には入るものとみななければなるまい。……戦国城郭の一步手前の段階にある姿と捉えてよいのではなかろうか。』とまとめてある。後者は上城からの移転とする見方が一般的であるようである。両者はともに吉田氏の居城である。

- ・引用・参考文献^① 田野辺道宏『上城城址』「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(20)九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告VI 小山遺跡 谷ノ口遺跡 宮後遺跡 上城城址」鹿児島県教育委員会 1982年3月
- 鹿児島県教育委員会鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(36)
- 「鹿児島県市町村別遺跡地名表」1985年3月

第Ⅲ章 遺跡の概要

第1節 本吉田城(カユウカ城)の縄張り

この城跡は第1図でわかるように南と北に本名川が流れ、南の支流はマエンコッ(前の川)北の支流はウシロンコッ(後の川)と呼ばれている。また、集落もマエとかウシロとか呼び合っている。これは、前の川と後の川の間台地があり、この台地を境いにして呼ばれていることに何かの由縁があると思われる。その台地に本吉田城は所在する。

本吉田城の縄張りは、南側と北側の本名川が堀の役目をはたし、台地西側の最もくびれたところに空堀をつくり、野首の位置がわかる。この野首の空堀は現道のトンネルが出来る以前の旧道として使用されていた。東側は下から登る大きな堀があり、この堀は2回に折れてつくられ通路と空堀の役目をはたしている。この堀には東側に土塁がそえられ、西側には段々の帯曲輪をつくっている。この西側の空堀と東側の空堀間は約150mである。南側と北側には低地の水田や住宅地があり、比高差は約75mあり山城の形態をなしている。よってこの本吉田城の規模は東西約150m、南北約400m、高さ約75mの縄張りが考えられる。

この山城は標高221mを最頂部にし、東西60m・南北7mの郭を造っている。この郭は東から3段に大きくわけられ、最も西の段に5×4mの壇を設けている。この郭を中心に南斜面上に4段の帯曲輪を設けている。図2の帯曲輪1～4にその位置・形状を示す。

帯曲輪1は郭のすぐ下の段で、帯曲輪2は帯曲輪1の東下の段である。帯曲輪3は帯曲輪1の下の段であり東側に堀1からの通路らしきものがある。ここは土塁を南側につくり、北側に帯曲輪2との間を出入口に設けている。帯曲輪4はその下の段である。

堀1は最も東側の空堀で最も大きく、堀道の役目もはたしたと思われる。堀2は野首側の堀で搦手の役目もはたしたと思われる。堀3は北側の空堀で調査の結果薬研堀であった。堀4は西側に延びる尾根の、郭に最も近い空堀で調査の結果箱堀であった。堀5は西側にあり、調査の結果薬研堀であった。堀6は西側にあり南北に長く伸びる薬研堀の堀である。堀7は堀5の東側にある空堀で調査の結果薬研堀であった。

土塁は4ヶ所にみられ、土塁1は堀1の東側にそえられ、東側の防御にあててある。土塁2は帯曲輪3の出入口に設けてある。土塁3・4は空堀6・7と組み合わせられたものと思われる。

以上が本吉田城の縄張りである。

第2節 郭・帯曲輪の調査

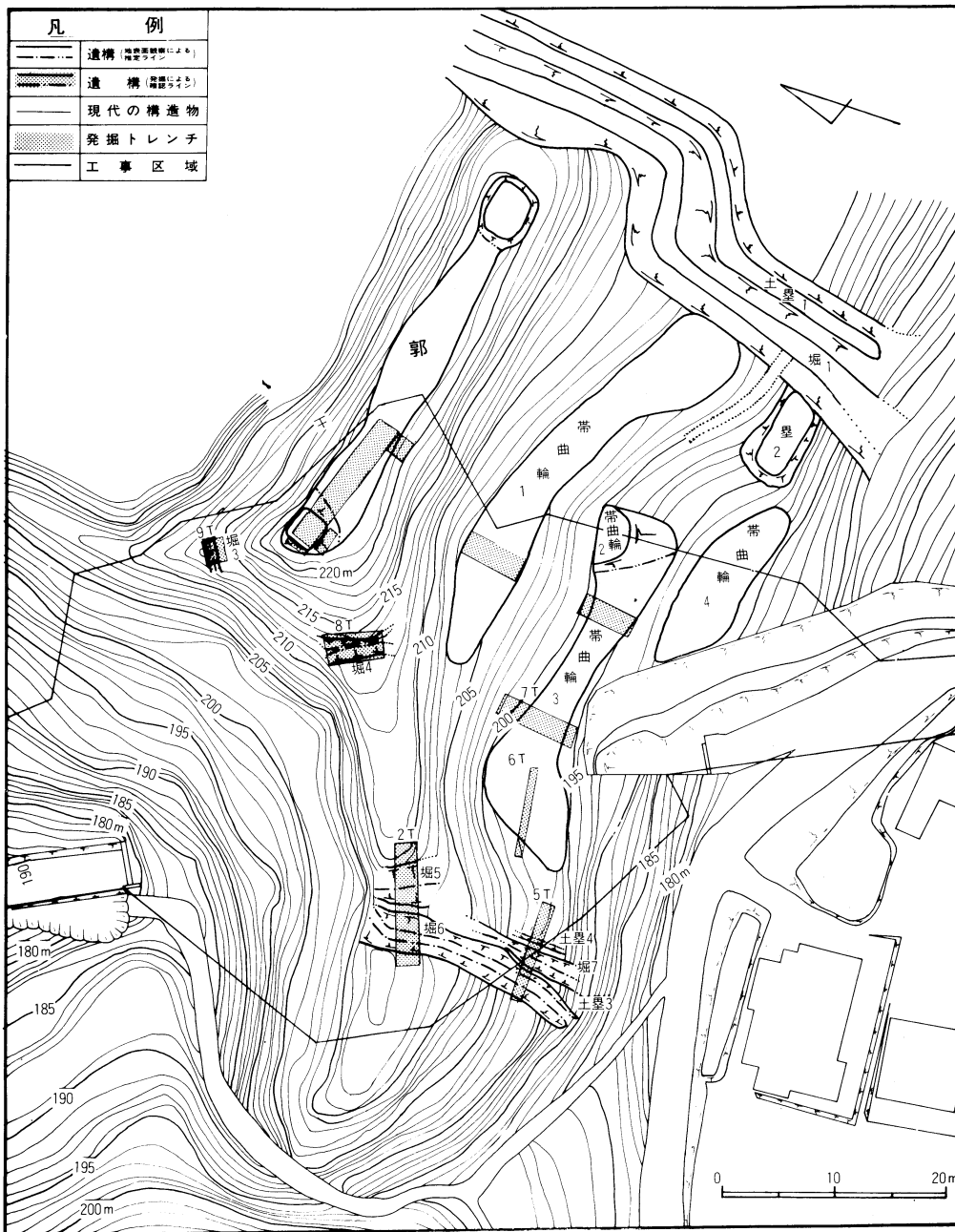
1) 郭

郭の部分はほぼ全域にわたって表土を除却し遺構の検出に努めたが、なんらの遺構も発見できなかった。また、青磁の碗の破片(遺物番号4)が1点出土した。

2) 帯曲輪

帯曲輪1では遺構は検出されなかったが白磁の破片(遺物番号1)が出土した。

帯曲輪2は工事の土取のため、安全上疑念があるとのことで発掘できなかった。



第2図 本吉田城遺構配置図・トレンチ位置図

帯曲輪 3 は最も長い曲輪で東西に約45m、奥行が約 5 mであった。築城面は現在の地表面より最深部で約 1.5 mあり、後世の二次堆積が厚いことがわかった。なお遺構は発見されなかった。遺物はこの帯曲輪で最も多く出土し、5点出土しているが、ほとんどがシラスの崩落土中からの発見である。

帯曲輪 4 は、発掘以前、工事着工時に破壊されていた。

3) 空堀

堀 1・2 は工事区域外であるため発掘調査はしていない。

堀 3～5 はいずれも尾根線に対してほぼ直角に設けられ、尾根を断ち切っている短い空堀であった。

堀 6 は、堀 5 に隣接し南斜面上に長く伸びており、帯曲輪 3 の西側をもカバーしている。

堀 7 は、堀 6 の下半部東側に土塁 3 を挟んで設けられている。

以上のうち堀 4 が箱掘であったほか、いずれもが薬研掘であった。規模については第 1 表にまとめる。

第 1 表 堀の規模等一覧

番号	規 模	形 態	番号	規 模	形 態
1	長さ 50m×幅 10 m×深さ：不明	薬研掘？	5	長さ10m×幅6.5m×深さ3m	薬研掘
2	長さ100m×幅 10 m×深さ：不明	薬研掘？	6	長さ40m×幅3.5m×深さ1m	〃
3	長さ 7m×幅3.5m×深さ 2 m	薬研掘	7	長さ18m×幅 4 m×深さ2m	〃
4	長さ 10m×幅2.5m×深さ1.9m	箱 掘			

4) 土塁

土塁 1・2 は工事区域外であり発掘していない。

土塁 3 は堀 6・7 を掘ることによって残されたもので、頂部は平坦面を持たない。また土層からは掻き上げて盛ったようには見えなかった。

土塁 4 は堀 7 の東に添って設けられたもので、版築は見られなかったものの、掻き上げと見られる盛り土が頂部にあり平坦面をつくっていた。第 2 表に規模をまとめる。

第 2 表 土塁の規模一覧

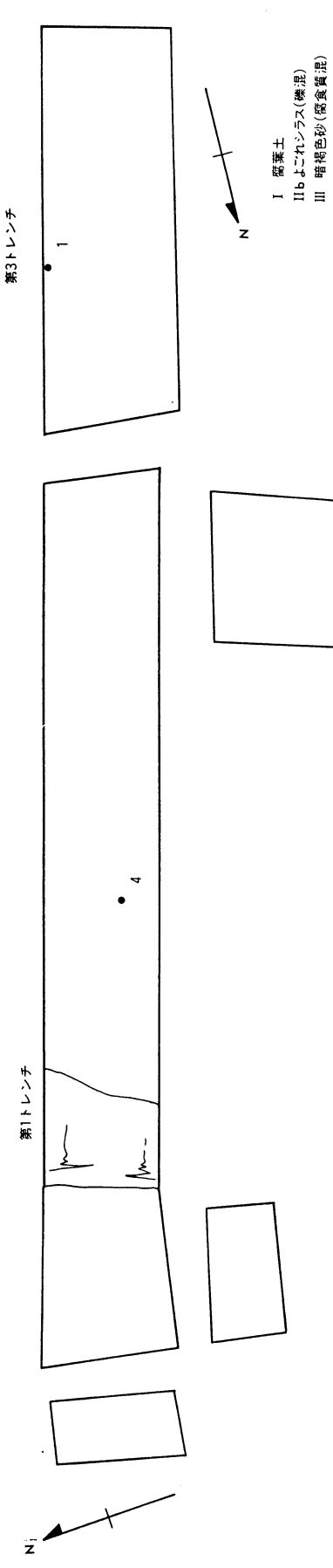
番号	規 模	番号	規 模
1	長さ50m×幅 5 m×高さ1.5m (地表面観察)	3	長さ10m×幅 3 m×高さ1.3m
2	長さ10m×幅 6 m×高さ 1 m (〃)	4	長さ10m×幅1.5m×高さ3.4m

第 3 節 遺物

1 は第 3 トレンチ第 II b 層出土の白磁の皿である。外面に水引の痕を残し、ややにごった釉がうすくかかり、細かな貫入が見られる。

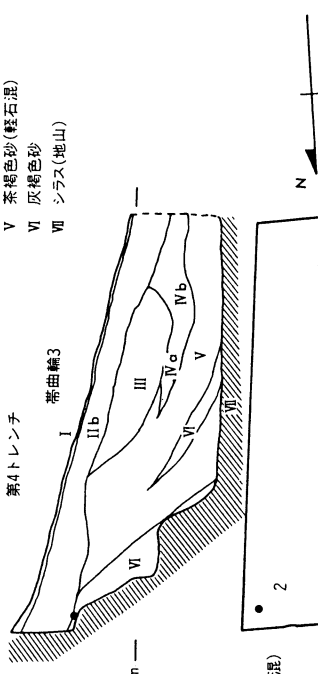
2 は第 4 トレンチ第 II b 層出土の青磁の碗である。玉緑状の口縁を持ち、やや灰色がかった緑色の釉が厚くかかっている。貫入はみられない。

3 は第 7 トレンチ第 II b 層出土の青磁の皿である。口径が 7 cm、高さが 3.1 cmあり、高



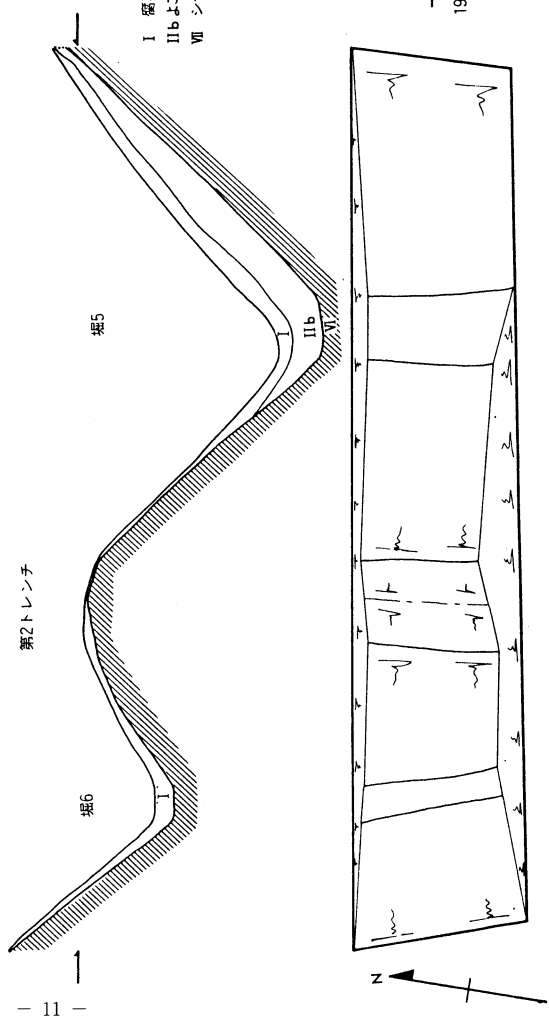
第3図 第1～4・6トレンチ平面図・土層図

- I 腐葉土
- IIb よこれシラス(礫混)
- III 暗褐色砂(腐食質混)
- IVa 淡褐色砂壤土(旧表土?)
- IVb 暗褐色砂壤土(腐食質多)
- V 茶褐色砂(軽石混)
- VI 灰褐色砂
- VII シラス(地山)



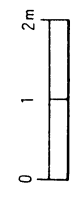
196.4m

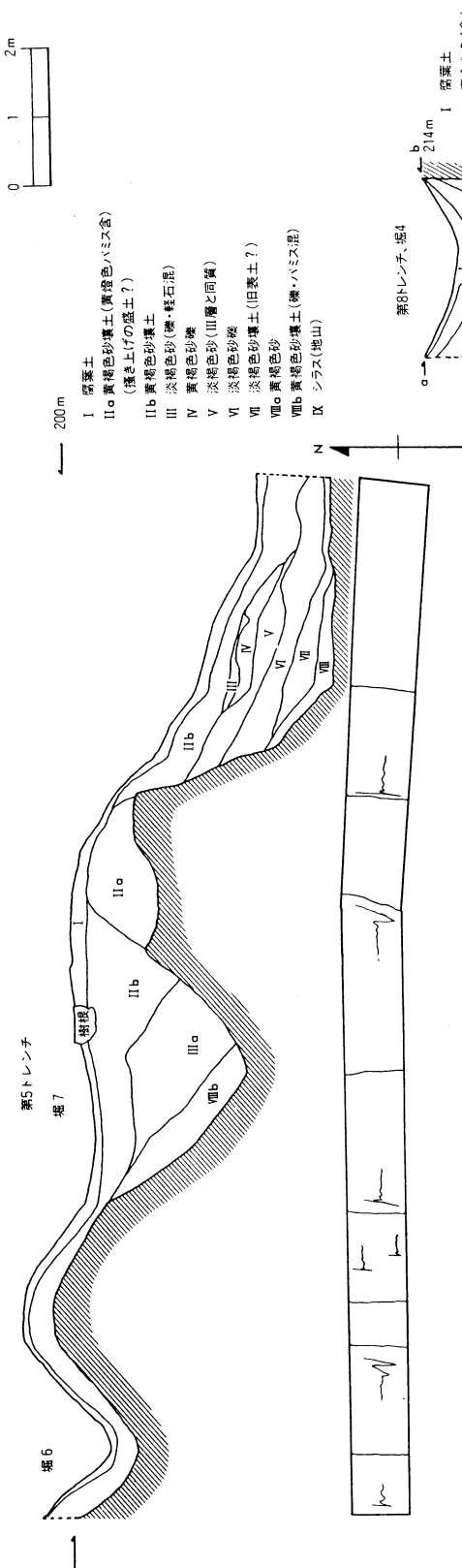
- I 腐葉土
- IIb よこれシラス(礫混)
- VII シラス(地山)



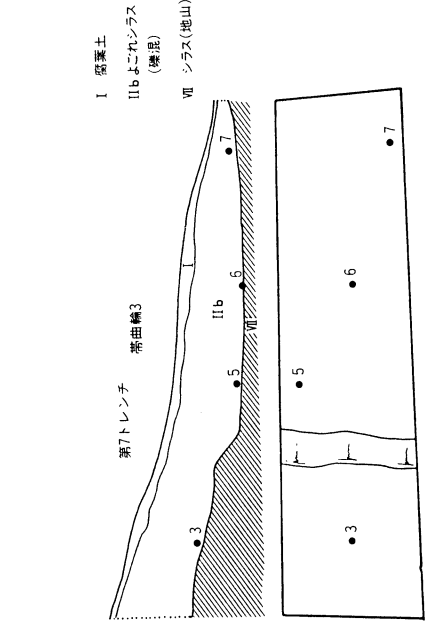
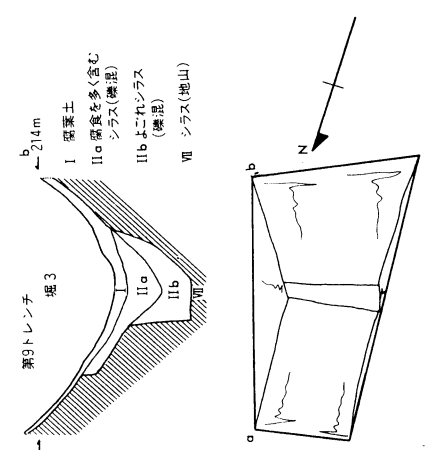
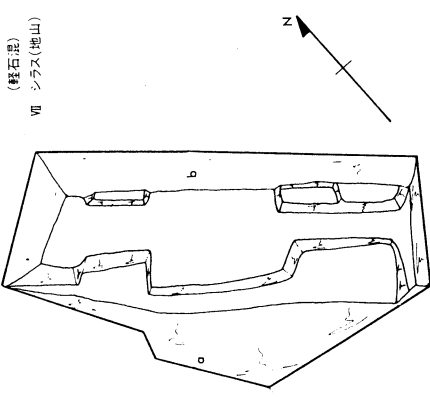
197.8m

- I 腐葉土
- IIb よこれシラス(礫混)
- IVa 淡褐色砂壤土(旧表土?)
- IVb 暗褐色砂壤土(腐食質多)
- VII シラス(地山)





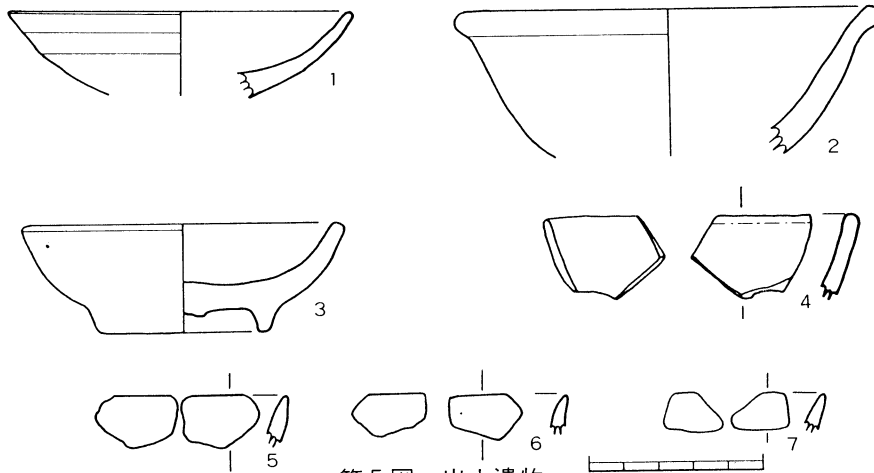
第4図 第5・7・9トレンチ平面図・土層図



台・畳付まで施釉してある。内底部は露胎となりへら削りの痕を残す。釉は2と同じような色調であるがやや粗い貫入が見られる。

4は第1トレンチの第II b層出土の青磁碗の口縁部で、青灰色の釉でやや粗い貫入がはいり、外面に陰刻が見られるか、全体の文様はわからない。なお、2次的火熱を受けたように見うけられる。以上1～4の時期については15C～16Cの年代が想定されるのではなかろうか。

5～7はいずれも第7トレンチ第II b層出土の土師器の皿の口縁部である。いずれも小破片であり大きさは復元しえないが、灯明皿の破片のようである。



第5図 出土遺物

第IV章 まとめにかえて

この本吉田城は別名カユウカ城と呼ばれている城で、最初は大藏行忠氏の持城といわれている。カユウカ城は天仁三年（1110年）から文献にはあらわれるが、カユウカ城築城の資料は残っていない。その後、大藏氏から大隅正人幡宮の神宮の息長の清道に譲渡され、吉田家を名のった清道氏が台所を受けもっていたために、カユ(粥)からカユウカ城の名称が生まれたという文献もある。（薩隅日州古戦場記）

この城は郭が1つの単郭式山城で、郭の周囲に帯曲輪を設けたもので建物跡が確認されなかったことは詰の城として考えてよいのではなかろうか。

その縄張りは南北に川があり、東西に大きな空堀を設けたもので、東側の空堀が大手道、西側の空堀が搦手道と考えてよい。居館の位置は山城の向きや、遺構等から南側の低地と考えられ、現在空地となっている地域と思われる。

この山城の性格は詰の城であると考えられるが、大藏氏の築城がここであったと仮定した場合、出土遺物の年代にそぐわないので、その後、吉田氏の出城として使用されたと考えられる。ちなみに、吉田氏は、本城地区にある本城が最初の居城で、さらにその後、佐多地区の松尾城に移ったといわれている。

図版1 本吉田城遠景



南から

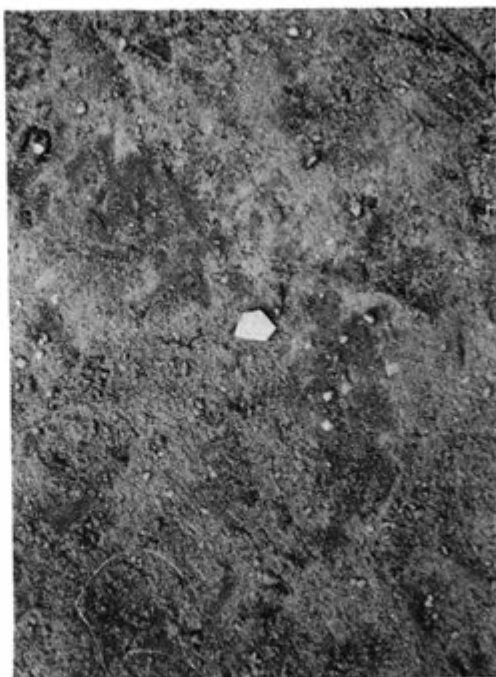
北から



图版 2 郭



郭发掘完了



郭遺物出土狀況

发掘風景



郭全景



図版3 帯曲輪 1、3



帯曲輪1(第3トレンチ)



帯曲輪3(第6-奥-、第7-手前-、各トレンチ)

図版4 帯曲輪3



第4トレンチ東壁土層



第4トレンチ遺物出土状況

図版5 堀 4



南側から撮影、右が郭へ



西側尾根上より撮影、左上が郭へ

図版6 堀5・6・7、土塁3・4



←堀5、南側から

←第2トレンチ
↓

↑ 手前堀5、奥堀6、
東側から

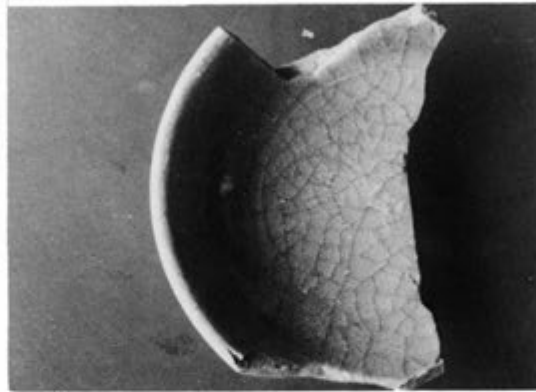
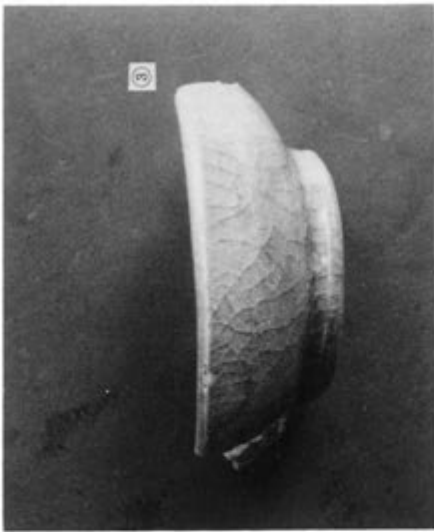
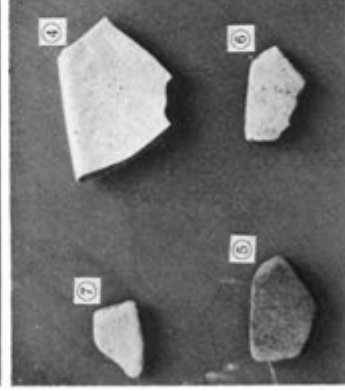
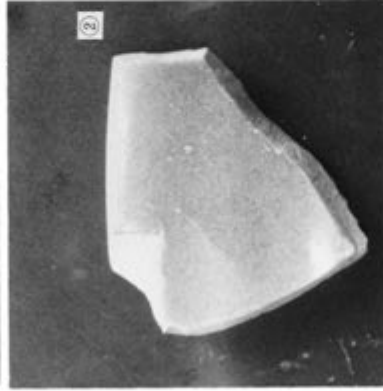
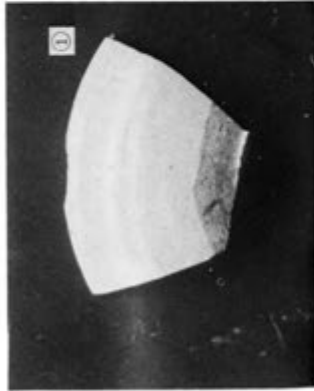
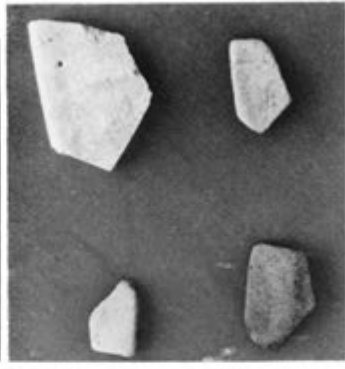
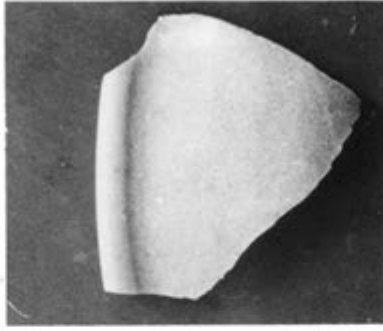


↑ 手前土塁4、中堀7、
奥土塁3、東から

↑
第5トレンチ→

土塁4、南から→





鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(41)

県道鹿児島本名線の改良工事に伴う報告書

本 吉 田 城 跡

発行日 昭和61年3月

発 行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14-50

印刷所 アルプス印刷有限会社 〒892 鹿児島市下竜尾町26-1
TEL (0992) 47 - 2288